龍の籠

黒ノ木　ハジメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍の籠

【Ｎコード】
Ｎ４９４１Ｏ

【作者名】
黒ノ木　ハジメ

【あらすじ】
少年が旅をして成長していく話です。初めての小説です。面白くなかったらすみません。でも、僕の最高傑作です。

旅立ち（前書き）

この国は龍を神と拝めていた。そして、この国の王家の持つ宝剣はこの龍が自分の鱗で作って渡したという伝説があった。

こんな国では、農作物の生産が盛んで国民全員裕福だった。しかし、そんな国で干ばつが起きた。これは、神の試練だという国民が出てき始めた。そんななか王子は自由を求め身勝手に旅に出た。この旅で王子が得たものとは・・・。

旅立ち

「それで、南の農作物の状況はどうなっている・？」
暗い部屋で大きなテーブルを囲んだ大人数の中で最も派手な赤色の服を着た少し太った男が誰かに聞いた。
「ハッ。」まるでクリーニングしたてのような服を着た青年が勢いよく立って「申し辛いのですが・・・以前より進行していまして、約６０％の土地が枯れ果てました。」
と答えた。制服なのかそこにいた太った男以外の男たちが同じ服を着ていた。
すると、この集りの中で端っこにいた最も年をとった男が静かに口を開いた。
「王よ。やはりこれは神（龍）の仕業かもしれぬ。神は我らに生と死の試練を与えているのだ。・・・『コロナの預言書』にもそう書かれている。」
その男は右手に水晶の玉が付一いた細い樹木の杖を持っていた。そしてその杖をついて立ち上がった。そう言われた王はため息をついて聞いた。
「それでは預言者よ。」一息ついて、「あと何年続くのだ　そのお、ええっとその神の試練とやらは。」
「預言書にはそれらしきものが十五年は続くと書かれている。この国の国民の約三割が死に絶えるだろう。王の決定次第ではもっと亡くなるかもしれない。」
暗い会議室がざわめく。それを王の隣にいた側近が鎮めた。王も頬杖をして歯を噛締める。
「くそっ。・・・。」そして王は両手をあげ、声を荒げて言った「神よなぜあなたは・・・。」両手を下げまた言った「ハーッ。もういい。休ませてくれ。会議は終了だ。」側近が「解散！」と言った。するとテーブルを囲ったたくさんの大臣たちが一斉に立ち上が

り、そして一斉に礼をした。大臣たちは静かにぞろぞろとこの部屋を出た。部屋には預言者と目をつむっている王だけが残った。王に預言者が言った。
「私は預言しか教えてあげられない。この情報をどう使うかあなた様次第だ。預言は誰かの影響で変わることもある。・・・それと王子には気を使うことだな。」
王は「今はそんな余裕などない」っと言ってこの部屋を出ていった。預言者は悲しい目で王の腰にある魔法の剣を見ていた。やがて王は見えなくなり、王が座っていた豪華で歴史ある椅子を見て部屋をあとにした。

＊＊＊

王は、会議室のある議事堂を離れ王の住む宮廷に戻った。すると三人の若い家来が走ってこちらにやってきてこう言った。
「王子を見ませんでしたか、閣下」あまりにも焦っていたので、びっくりしてこう答えた。
「わしは見とらんが、息子がどうかしたのか？」三人の若い家来は言おうか迷って、口を開こうとしたが王の背中から声が聞こえた。
「いいえ、何もありません。王子は外で楽しくやっておられます。一人でもありませんし、大丈夫です、閣下。」その声の持ち主は三十年間ここに務めていて今長をやっている家来だった。
王は、そうか　と言い、龍のが描かれている廊下に行ってしまった。四人の家来は王が見えなくなったのを確認して若い方が聞いた。
「庭にいたのですか。すみません。ちょっと目を離したすきに・・・」
「いいえ。庭にはいませんよ。」
「えっ。だって今・・・」
「ええ。嘘を言いました。あなたたちを守るために。牢屋に放り込まれる前に王子を探しなさい。」

「あっ、ありがとうございます。」そして自分の仲間に「さっ、みんなで手分けして探そう」と言ってバラバラになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『龍の廊下』を王は歩いていながら思った

(預言者の言っていたことはこのことだったのか)と、王子のことを考えていた。

『龍の廊下』には天井に二匹の蒼い龍が描かれている。ここを通れる人間は王家のものだけである。

廊下を渡りきり王室のまえの大広間に出た。そして部屋の扉を開けようと取っ手を握った瞬間後ろに気配を感じた。だが王はそれが王子だとすぐにわかった。王子は小さい頃王を驚かせようと広間にある大きな植木鉢によく隠れていたものだから。しかし、ある日から王子は王と遊ばなくなり王はとても悲しんだ。そんな王子がこうやってまた遊んでくれているんだと思った王は、逆に王子を驚かそうと身構えたおうじの気配がゆっくり近ずいてきた、そして振り向いた瞬間。

「かくごぉーーー！」ドスッと王子の手が王の腹に当たった。王は王子をいつもより大きな目で見た。王子は下を向いて震えていた。そして、おうの腹にある手をゆっくり見た。その手にはナイフがあった。王子のナイフを見てやっと腹の痛みが分かった。

「何をやっているクリストファッ」王は王子のナイフを掴んだベットリとした血が自分の腕を伝って滴る。まさか自分の息子の手によって血を流すなんて、夢にも思わなかった。王子は顔を上げた。その顔には一粒の涙があった。

「すまん、父さん。俺は、俺は王にはならない。俺は俺の人生を生きてやる。」王は足の力が抜け、バタンと倒れた。クリストファは父に刺さっているナイフを抜き、腰に付いている魔法の剣をベルトごと取った。すると王は「お前なんぞにその剣は抜けん・・・」

と言って気を失った。
王子は王に背を向け、植木鉢に隠してあったたくさんの荷物が入った包みを持って大広間を出た。
その後、王は側近に見つかり命に別状はなかった。そして、G(ガヴァメント・)GG(ガード・ギルド)に王子を傷つけずに見つけ渡すよう任務を命じた。報酬は永久的に家族とともに、なに不自由のない生活を送らせることを約束することだった。

　　****************************
****
****

その頃、王子はGGGのあるこの国の第二の都市に行くことを決め、危険な大砂漠を北へ横断する旅が始まろうとしていた。

旅立ち（後書き）

読んでくれてありがとうございます。評価はできればお願いします。厳しくね？

仲間

砂漠の温度は－１０。になっていた。そこに一人の少年の姿があった。
クリストファはたき火のそばでさっき焼いた干し肉をかじっていた。隣に羊の革でできたシュラフと大きな荷物の入ったバッグがあった。肉を石の上に置いて、バッグから国の宝剣を取りだした。そして、両手で抜こうとしたが全然抜けない。何回か試したがやっぱり抜けなかった。あきらめてまた肉をかじり始めた、噛みながら月を見た。月は蒼い満月だった。その後また肉を見てかじった。
肉を食べ終え、シュラフに包まり（くるまり）宝剣を見ながら静かに目を閉じた。
次の日、日があと少しで見えるって位昇っていた位の頃にクリストファは起きた。シュラフを片付け宝剣を握った。すると、鞘に文字が彫ってあった。目を凝らして見るとそこにはシャウラ（Ｓｈａｕｌａ）と書かれていた。
クリストファは「しゃ・う・ら？」クリストファはこの名前を聞いたことがあった。
「たしか『毒針』って言っていたような気がする・・・」また、ちょっと考えてベルトを腰に巻いた。そして、宝剣の反対側にはナイフを納め、大きなバッグを担ぐ。いつの間にか太陽が半分も顔を出していた。そんな太陽を右にゆっくり歩き出した。
なにもなくお昼になった。クリストファは暑い砂漠を歩いていた。すると、前から人が歩いているのが見えた。（・・・幻覚か？）目を凝らして見てみる。やっぱり人だった。汚いローブを着ていて顔は見えないが・なんだか年寄りみたいに歩いていた。人はこちらに向かって歩いていた。ちょっと時間がたって、クリストファの前にその『人』が立っていた。『人』はローブのフードを脱ぐ。するといつもは杖を持っていて王の後をついていっている預言者だった。

「な、なんでお前がここに・・・」とクリストファが言った。すると預言者は
「たまたま、北の町を見に行っていただけだよ。」と笑顔で言った。そして続けた。
「あれ、その『剣』お父様が持っていたんじゃなかったけなぁ・・・。まあいい、その剣のこと教えてあげようか。」といって古そうな、いや古い本を古い鞄（？）から出して
「これに全部書いてある。んふふふっ、ハーッハハハ。がんばれよ。」満面の笑み
（こいつ気持ち悪いな。まあ昔からそうだったなこのじいちゃん）
そう言って本を見る。題名を読んだが読めなかった。本を逆さにした、でもやっぱり読めない。
「なんだよこの本。何語だこれ。」そう言って顔を上げた。すると、そこにいるはずの預言者の姿はなかった。
「お、おい。じいちゃん！どこにいるんだ？」
『その本は、龍の道具がないと読めないようになっている。この大陸に１０個の“龍杯”がある。それを探してその本を読んでから、家に戻ってくるのだな。さすれば父もそなたを許すだろう』と頭に響いて預言者の声が聞こえた。そして翼を翻し飛んでいる鷲が後ろから来て、朝日に消えた。
「マジかよ・・・。」本を開く、でもでも読めないパラパラページをめくる。
「ハァーっ。」とため息が出る。
本を鞄にしまい、担ぐ。
「ッタク、どれくらい歩きゃいいんだよーー。」叫んだ。当たり前だ2日も歩いたんだ。そして今はもう夜。
「方向は間違えてねぇーし。」そう言いながらシュラフを出す。そして火を焚き肉の用意をする。すると預言者から貰った本が目に付いた。
「旅に役立ちそうなものくれよな。」本を開く。すると紙が出てき

た。
「ん？」
そこには、「た・と・な・す？」聞いたことのある言葉（？）だった。そして続きがあった。「見知らぬ人にはその名を使え。それともしかしたらその剣が抜けるかもしれないなぁ。」
めんどくさくなって肉を食って寝た。
その夜、クリストファは呻いていた。
「ううっ」
『女の人が見える。こっちを向いている。笑顔だ。女の人が俺を持ち上げ抱く。声を出して女の人が微笑む。とってもあったかい。その脇には見たことのある顔だ。父さんだ。でもなんで？すると一瞬であたりが暗くなって二人が消えた。下から赤いのが出てくる。火だ！逃げろ。でも思うように体が動かない。火の向こうにさっきの女の人がいる。助けなきゃ、でもこの体じゃ。後ろから人が来て俺を抱く。父さんだ。女の人に向かって叫んでる。向こうも叫んでる。父さんは歯を食いしばり反対方向に向かって走りだした。』
「はっ」がばっと起きる。汗をかいていた。顔を上げる。周りが暗い。太陽が出てきそうにない。すると、二つの黄色い光が低い砂山の向こうに見えた。でも、どんどん増えていく。怖くなって宝剣を握る。黄色い光が目に変わっていき、近ずいて来る。
「き、キロスだ。」キロスとは群れを成して狩をする四足の動物で、夜行性で狼のような姿をしている。
キロスはクリストファが生き物と確認したのかこっちへ走ってくる。
（ヤッベ。に、にげろーー）急いで起き上がり走る。「バンッ」「ババン」銃声が聞こえてきた。「な、なんだ？」反対方向から三匹のステノの足音が聞こえてくる。でも銃声はやまない。後ろにいたキロスが怯えていてこっちに来ない。キロスの前の砂が銃声と共に跳ね上がる。すると、キロスたちは逃げていく。
「助かったぁ」
ステノから「オーイ、だーいじょーぶかー？」

ステノを見ると人が乗っている。ステノとはラクダのような生き物だ。
クリストファは短剣を抜きステノに向ける。ステノたちはクリストファの前に止まり、人が降りる。三人。
「わぁ怖い。短剣下ろしてくんない。俺たち助けたんだよ君を。ねぇ。」三人のうち真ん中にいた２５歳くらいの男が言った。
「んもう。そんな風に言ったらダメでしょ。」右にいた２０歳ぐらいの女が言った。女の肌はとても白く美しかった。
「ねぇ君私たちはＧＧＧよ。安心してちょうだい。」女はこっちによってきて短剣を握ろうとした。
「さ、触るな」短剣をふりわす。しかし、女はクリストファの腕を握り引っ張るそして腕を曲げた。クリストファは動けなくなり短剣を奪われた。
「くそっ」
「おいおい。そんなことしたら余計警戒されるだろ、離せタルキア」左にいた肌が黒く筋肉質の男が言った。タルキアと呼ばれた女は手を離す。クリストファは膝立ちになり握れていた腕を揉む。
「俺はマスタード。でお前の後ろにいるのがタルキア、そしてこいつがアリフ別に悪気はないんだ許してやれ」
「おいお前加減をしらねぇのか」タルキアに向かって叫んだ。
「仕方ないじゃない。だいたいあんたがこんなもん向けるから悪いのよ」
「ああん。やんのかコラ」
「やる？」
「二人ともやめろ。」
こうして仲間が増えたのであった。

初敵

なぜ3人が寒い夜に歩いていたかわからないが、クリストファの仲間になってから適当な場所を見つけ3人ずつ寝ることにして1人は眠くなったら誰かひとりを起こして回ることにした。そして朝5時30分になった。クリストファはまだ寝ていたが大人の三人は起きていた。若い青年のアリフは砂の上に布を敷いていて座りながらで刀らしきものを手入れしていた。服はアラブの黒い民族衣装を着ていた。下は先の膨らんだズボンを着ていた。マッチョな男マスタードは焚き火の火を生き返らそうと頑張っていた。マスタードはアリフと同じような服だったが両腕の部分が千切られていて筋肉質な焼けた腕が見えていた。そして最後は日に焼けていないように輝く白い肌のタルキアは料理の準備が終わりクリストファを起こそうとしていた。

「ねっ、起きてクリストファ。」

「あーあ、何だよ。って寒っ」

「かわいかったぞ、お前の寝顔ヒヒヒッ。」とアリフ。

「うふふ、それは言えてるわね。」

「ハッ？べっ別にどんな顔で寝てもいいだろうがっ」

（（そう言う問題じゃないと思うんだが・・・））

「ん、なんだその変な剣は？」

「クリストファは知らないのかコレ」とアリフが言い刀らしきものを持ち上げる。そして、

「これは東洋の武器。『カ・タ・ナ』って言うらしいが・・・東洋の文字はまったく読めん。なんだあの文字は！」

「「「・・・・・」」」

「あっ、すまん。カタナはこの辺の剣とは耐久力が比べ物にならない。」

「へぇ、そんなすごいのかソレ。・・・貸せソレ」

「ハァ、いやだよ。コレ高ぇんだから。」
「いいから貸せ。俺が言うんだから」と言って立ち上がりアリフに近寄ろうとするが、タルキアが止めた。
「止めなさい。そろそろご飯ができるから。座ってなさい。」
「えっ、あ、ああ」不意打ち食らったかのように頷き座る。
「ったく。おめえバッむんんん」マスタードがアリフの口を封じる。そして小さくアリフに
「よせよ。タルキアがせっかく鎮めたのに。お前も時には考えろ。」アリフがマスタードの手を振り切り小さく
「わ、わかったよ・・・」
「さっほらご飯ができたわよ。」と言いながら飯をつぐ。それを全員無口で貰う。
「うんめー。」今日のご飯はタジン鍋にその辺に生えていた少しの植物と干し肉を煮たものだった。砂漠では水はとても貴重なので一切使わない。彼らは鍋を持ち歩いていて食料も持っていたので食料の心配はなかった。が、心配がなかったわけではなかった。
「ねぇ、この剣抜けないんだけど。それとこの本何か知ってる？俺には読めないんだが。」
そう言って鞄から宝剣と本を取り出した。そして、クリストファは宝剣の美しさ驚いた。なにせこの宝剣を見たのは夜暗いときと、お父様から奪ったときしか見ておらずしっかりとは今まで見たこともなかった。コバルトの地に金と銀の装飾にルビーとサファイヤそしてダイヤまでが付いていた。それを見た3人はもっと驚いた。
「おまえ、・・・いいもん持ってんじゃねぇか。見せろそれぇ」
「さわんなっ。代々大事にしてきたんだから。」と腕を引きアリフから遠避(とおざ)ける。
「ねっ、その本見せて」とタルキアが本を無理やりとる。
「あっ」タルキアは興奮してこう言った。
「ねぇ覚えてる祝１０回任務達成記念でやった『古建探索チームに参加せよ』ってやつ」アリフは苦いものを噛んだかのような顔をし

てこう言った
「あ、ああ覚えてる。最悪だったよ。せっかくの任務だったのに暇すぎでつまんなかったし」
「ええ全然つまんなくなかったじゃない。読めないじ読めるようになったのよ。最高だったわよ、ねぇマスタード。」
「あ、ああ」
「いいや、つまんなかった。」
「いいえ」
こんなことを2人は続けた。そしてクリストファは我慢できなくなり
「ああもう、それとこれがどう関係あんだよ！」
「あ、ごめん。そのときに覚えた文字と同じだったの。でもこのことはまだ公表しないって、まだ公表してないの。その文字がここにもあるなんて」
「読めるのか」
「ちょっと待って・・・確かこの辺にノートが・・・。あった、これこれ。」タルキアは大きさのバラバラの紙の束（ノート）を広げた。
「ほら、これ」そしてアルファベットの下に確かに似た文字があった。すると珍しくマスタードが
「その宝剣にもあるぞ。」
「ほんとだ確かにねぇ貸して」そしてまた無理やり取る。
「ああ」クリストファは気の弱そうな声を上げる。
「こっちの方が簡単そうだわ。読むから。」と言って黙り始めた。
そのほかの3人は冷めたご飯を食べ始めた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「読めたわ」クリストファ達はご飯を食べ終え自分たちの布で食器を拭いていた。そしてクリストファが
「なんて書いてあるの」
「直訳すると『自分の名を叫べ、さすれば私はそなたを助けよう。

罪あるものは罰せようぞ』だって」
「どういう意味だ、それ」
「要するにお前の名前を叫んで抜けばいいんじゃないの？」
「ふうん。やるか。」クリストファは勢いよく息を吸い
「クリストファーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」
・・・・・・・宝剣は抜けなかった。
「抜けねぇじゃねぇかこの野郎」
「誰に向かって言ってるんだこの野朗」
「ああ、やんのかバーカ」
「やってやろうじゃねぇか」すると毎度のごとくマスタードが止めに入る
「やぁめぇろぉお前ら！」
「「ハイ！！」」
なぜかマスタードの声を聞いて気を付けをしてしまった。マスタードの横でタルキアが座りながら読めない本の絵だけを見てはページをめくっていた。すると
「ん？ねぇこれ見て」
「これってクリストファの剣じゃないのか。」とマスタードがタルキアの指先にある絵を見て言った。
「うん、たぶんそうよ。自分で見てみてクリストファ」
「ああ・・・。確かに模様も似てるな。で、なんて書いてあんの」
「結構長いから時間かかるわよ・・・。でも先に進まないと。ステノあなたが歩かせて。私は後ろで解読するから。・・・できるよね。」
「えっ、俺！・・・できなくはないけどお前が乗るのか？」
「そうよ。だめ？」
「別にいいけど」クリストファの心臓がバクバクし始めた。
（なんでこんな・・・。いやおれはワクワクしてるんだ。落ち着け俺）
「なに赤くなってるんだよバーカ、ふん」

「な、うるせーな赤くなんかなってねーよ」
「あーー、はいはいそうですね」
「なんかムカつくなお前」
「行くわよー」いつの間にかタルキアはステノの所にいてステノを立たせていた。
「ああ、今行くよ」そう言ってアリフはクリストファの肩に肩をぶつけステノのほうに向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　彼らは４０度の炎天下の中ステノに乗っていた。ステノたちはゆっくり歩いていた。クリストファの乗るステノにはタルキアも乗っていた。すると、ドシンドシンと地面が揺れ始めた。
「な、なんだ」ステノたちが一斉に止まる。そして自分たちの危機が迫ってると鳴く声を出していた。すると揺らしている張本人の姿が現れる。マルムだった。マルムとは６本足の巨大なサソリの事だ。
「で、デカ！」初め見たクリストファは驚き思わず声を上げてしまった。しかし、アリフはなんともないかのようにステノから降り刀を抜く。そして
「へ、ビビってんのか坊主。大口たたいといてなんだ？」
「やってやるよ、こんなやつ」
「あんまり暴れるなよ、お前ら」マスタードは注意するだけでステノからは降りない。
「わかってるよっ」と言いアリフは刀を構えマルムに向かって走り出す。少し遅れてクリストファもナイフを抜き走り出すが少し戸惑いがあった。アリフは刀で足を切るがマルムの足はカンカン、と刀をはじく。マルムはどんなに攻撃されても痛さを感じないので他の生き物でも敵と自覚しない。そのため最初の間は暴れないが、暴れるとすごいことのなる。そしてアリフは後ろの足一本を切り落とした。

「キシャーーーー」マルムが前足二本を上げ雄たけびを上げる。これがチャンスと思いクリストファはマルムの背中に乗る。
「オラオラオラーー」クリストファはナイフをマルムの背中を刺す。がやっぱりはじかれる。しかし、少しは痛かったようで尻尾がクリストファに向かってきた。クリストファはそれに気付き背中から飛び降りる。
「グシャ」針がマルム自身に刺さる。奥まで刺さったみたいで青紫色の血が飛び出る。クリストファは半身だけ起こしマルムの最後を見届けたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4941o/

龍の籠

2011年10月8日03時29分発行